

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：62615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03907

研究課題名(和文) IT化時代における家族実践：世代間コミュニケーションの実態解明

研究課題名(英文) Family practices in using IT devices: Understanding intergenerational communications

研究代表者

砂川 千穂 (Sunakawa, Chiho)

国立情報学研究所・コンテンツ科学研究系・特別研究員

研究者番号：90735094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは、IT化のすすむ現代日本社会における異世代間コミュニケーションの実態解明を試みた。特に、IT技術の発達に示唆される変化のスピードと、習慣や経験知にもとづくコミュニケーション実践の定着の相関関係を明らかにした。主に、インターネットやコンピュータ使用に関する経験知や、期待に異世代間に差異と分断の可能性があることは、会話のなかでコミュニケーション齟齬として認識される。こうした問題に直面したとき、話者は言語的・非言語的要素を活用して、様々な方法で問題解決に志向し、調整していることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This research project attempts to better understand how participants negotiate intergenerational communications. Particularly in this modern era where the use of IT devices is pervasive, it is utmost important to understand how speakers with different digital experiences and expectations can collaborate on establishing a common ground. A range of analyses accomplished in this project suggest that when participants engage in conversations regarding using digital devices, they used various semiotic resources including language and bodily behaviors in order to identify and negotiate different understandings emerged in the course of interaction.

研究分野：社会言語学

キーワード：テクノロジーとコミュニケーション 談話分析 異世代間コミュニケーション インタラクション 相互行為 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

産業や IT 技術の発展により、現代日本人の家族形態も変容している。高齢化、核家族化が進む一方で、「嫁」「姑」「親孝行」のような日常的なことが指標するように、家族制度に起因する家族の概念は人々の意識に根強く残っている。こうした家族内の縦のつながりを重要視する一方、IT 使用に関する世代間差は著しい。平成 25 年度の調査によれば、60 歳以下は 90% がインターネットを利用するのにに対し、60 歳以上のインターネット利用率は下落している。このような量的調査結果は、コミュニケーション方法をめぐり、異世代間で差異と分断の可能性があることを示唆するが、実践の場でこれらがどのように解決されているかを明らかにする質的研究はまだない。よって IT 化と世代間コミュニケーションの相関点を明確化し、これからの高齢化社会におけるコミュニケーションのあり方を提示することは重要な社会的課題であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、①メディア使用現場における、日本人家族の世代間コミュニケーション実態を解明し、②学際的アプローチを用いて、異世代間コミュニケーション研究に新しい方法論を提案することを目的とする。コミュニケーションを徹底的に分析し、メディア使用という新しい現象と、長い時間をかけて培われたいわば古い習慣との相関関係を明らかにする。IT 化・高齢化によりこれからますます異世代間でのコミュニケーション場面は増加するであろう。本研究を通じ、異世代間コミュニケーションにをより良いものにするための実践的モデルを提示することを目指す。

3. 研究の方法

本研究課題の目的を達成するために、以下の手順で研究をすすめた。スカイプを通じた異世代間家族コミュニケーション実践データコーパスを基礎的研究にそえ、IT 機器使用にまつわる異世代間コミュニケーションの齟齬を明らかにし、それらを土台にメディア経験と家族意識に関する談話実験、インタビュー、座談会を実施した。20 歳代から 70 歳代まで様々な年代層に IT 機器利用に関する談話を誘発させるためのイラスト談話実験を実施した。順序に正解のないオリジナルのイラストカードを 8 枚用意し、2 人 1 組の同性同年代ペアを組んでストーリー作成を依頼した。利用したイラストカードは以下の 8 枚である。

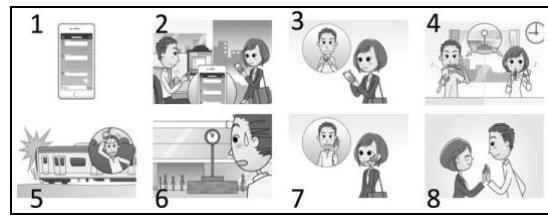


図 1：イラスト談話実験

イラスト作成にあたっては事前に検証・調整を行った。イラストカードは男女の通話場面、LINE をする場面、外出先でのハプニング場面など、IT 機器の介在する日常的な状況を含む。実験は別室で同時に 2 組行い、作成後は 2 組を 1 室に集め、研究者同席の上、ストーリーの報告と半構造化インタビューを行った。実験開始から終了まで可能な限り録画を継続し、ストーリー作成場面、半構造化インタビュー場面、実験参加者同士の余談、研究者との雑談など全ての行程を分析の対象とした。

データ分析結果を随時国内外で発表し、メディア志向的家族コミュニケーション研究の為の方法論構築に努めた（発表学会：社会言語科学会、SLUD、IPrA、Sociolinguistic Symposium など）

4. 研究成果

(1) スカイプを通じた遠隔地間の家族コミュニケーションデータの分析により、異世代間コミュニケーションは家の中や外、仕事場面など、日常の様々な場面で、調整の仕方に多様性があることがわかった。

(2) (1) の発見により、IT 機器利用の日常場面がどのように語りに現れるのかを調査する必要性が生じた。そのために上述のイラスト談話実験を企画立案・実施した。談話実験の分析結果は第 40 回社会言語科学会にてワークショップ、第 41 回社会言語科学会では論文発表として研究代表者、分担者と共に発表した。分析の結果を下記にまとめる。

(3) IT 機器を介在させた今回の実験では、ジェネレーション・ギャップを想起させる多くの表現が観察された。年齢と行動との堅牢な結びつきといった絶対的事実と捉えられていたものが実は相対的であり、相互行為の過程で様々な差異を調整し歩み寄るためのコミュニケーション資源として活用されていることを報告した。

(4) 実験参加者と実験実施者との世代を超えた笑いやからかいの場面を取り上げ、IT 機器が関係性転換のための装置として機能し得ることを示す。そのことにより、コミュニケーション上の関係性は様々な要素のどれを前景化・後景化させるのかといった相対性

によって柔軟かつ複雑に決定されることがわかった。

(5) 機器および機器を通して行われる活動についての解釈の異なりが顕在化され、最終的なストーリー決定のための資源として利用されていくプロセスがあきらかになった。具体的には、一度は合意に至ったイラストの順番が変更される「直しの活動」を取り上げ、イラスト細部、例えば機器が提供する活動の特性を見いだすことによってずれを調整し当初のストーリーに破綻がないことを確認し合うプロセスを解き明かした。

(6) コミュニケーションの差異解消のストラテジーは年代によっても多様であるが、どの年代も共通していたのはストーリーの確認作業をする点である。この確認作業を本研究プロジェクトのメンバーによる話し合いの末ビッグ・ストーリー (BS) 確認作業と名付けた。

(7) BS 確認作業は、ある種の詩的リズムを伴って物語を語る実践の中で生起する。本研究では、この作業が当該談話実験において、参与者間の共通基盤 (common ground: Clark, 1996) 構築に重要な役割を担っていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①砂川千穂・秦かおり・菊地浩平. 談話実験における言語行動と非言語行動の創刊関係ービッグ・ストーリー確認作業を事例に=社会言語科学 大 41 回大会発表論文集. Pp.1-6. 2018.

②菊地浩平・七田麻美子. 教職課程学生の ICT 活用授業に関する意識の変化. 杏林大学教職課程年報. Pp.121-130. 2018.

③砂川千穂・秦かおり・菊地浩平・片岡邦好. 第 30 回研究大会ワークショップ報告 Beyond the Gap. 社会言語科学 第 20 巻 2 号. Pp. 28-33. 2017.

④砂川千穂・秦かおり・菊地浩平. Beyond the Gap-コミュニケーションにおける「異なり」はどう処理されるのかー. 社会言語科学会. 第 30 回大会発表論文集. PP.222-231, 2017.

⑤坊農真弓. 誰もが議論に参加できる言語環境. 人工知能学会誌. 31(6). pp. 967-968. 2016.

[学会発表] (計 7 件)

①砂川千穂・秦かおり・菊地浩平. 談話実験における言語行動と非言語行動の相関関係ービッグ・ストーリー確認作業を事例に一. 第 41 回社会言語科学会研究大会 (JASS). 2018. 東洋大学

②砂川千穂. Interactional scaffolding: 遠隔家族会話における参与構造. 第 79 回 LC 研究会. 2018.

③砂川千穂. デジタル環境における「一つ屋根の下」: スカイク・ビデオを介した家族コミュニケーションの参与構造第 80 回 言語・音声理解と対話処理研究会 2017. 京都大学

④砂川千穂・秦かおり・菊地浩平・片岡邦好. ワークショップ: Beyond the Gapーコミュニケーションにおける「異なり」はどう処理されるのかー 2017. 関西大学

⑤砂川千穂. 相互行為の資源としてのジェネレーション・ギャップー時節をあらわす表現が指標するもの一. 社会言語科学会研究大会. (ワークショップ: Beyond the Gapーコミュニケーションにおける「異なり」はどう処理されるのかー) 2017. 関西大学.

⑥ Sunakawa, Chiho. Socialization in webcam mediated virtual space. Paper presented at 14th International Pragmatics Conference, Antwerp, Belgium. July 26-31, 2015.

⑦ Lebeuvre, Augustin, Mayumi Bono and Chiho Sunakawa. Information control and accountability in social interaction: The case of the theatrical performance. Paper presented at 14th International Pragmatics Conference, Antwerp, Belgium. July 26-31, 2015.

[図書] (計 3 件)

①秦かおり. 『みんな同じがみんないい』を解読するーナラティブにみる不一致調整機能についてのー考察. 「談話研究へのアプローチー創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦ー」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔 (編) pp. 219-350. 2017 年. ひつじ書房.

②砂川千穂. 空間をまたいだ家族のコミュニケーションースカイク・ビデオ会話を事例に. 「コミュニケーションを枠づけるー参与・関与の不均衡と多様性」片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編) pp.91-108. 2017 年. ひつじ書房.

③菊地浩平. 通訳者の参与地位をめぐる地位.
「コミュニケーションを枠づける—参与・関
与の不均衡と多様性. 片岡邦好・池田佳子・
秦かおり (編) pp.221-242. 2017年. ひつじ
書房.

[産業財産権]

特になし
[その他]
ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂川千穂 (Sunakawa, Chiho)
国立情報学研究所・コンテンツ科学研究系・
特別研究員

研究者番号：90735094

(2) 研究分担者

秦かおり (Hata, Kaori)
大阪大学・言語文化研究科 (言語文化専攻)・
准教授

研究者番号：50287801

(3) 研究分担者

菊地浩平 (Kikuchi, Kohei)
総合研究大学院大学・学融合推進センター・
助教

研究者番号：60582898

(4) 研究分担者：

坊農真弓 (Bono, Mayumi)
国立情報学研究所・コンテンツ科学研究系・
准教授

研究者番号：50418521